

国民総幸福量 (GNH=Gross National Happiness) とブータン難民

Manfred Ringhofer

2014年1月 4日

発表の趣旨

- * GNH本来の狙い及びブータン社会への導入の分析
- * ブータン難民問題とGNHの世界普及との相関分析
- * ブータンはGNHを世界中に広める資格があるのか？
- * ブータン難民問題は、単なる民族問題ではなく、人権と民主主義の問題であることを主張する

* 1. GNHの内容、導入の時期と幸福量

- * 1.1. GNHの4つの方針: 継続可能な開発, 文化の保存と文化的価値の促進、環境保存、良い政治(good governance)の成立
- * 1.2. 8(9) 一般的な次元: 物理, 精神及び精神的な安定, 時間的バランス, 社会及びコミュニティの活性化、文化の活性化, 教育、生活水準, 良い政治、環境の保護
- * 1.3. ブータン国内における全活動がGNH水準に基づきブータン政府によって評価されている(2008年以降GNH index導入)
- * 1.4. 2005年の国勢調査の結果: 国民の97%は「幸せ」?
- * 「very happy」, 「happy」, 「not very happy(3%)」= 100% (?)
- * 当時の文盲率は約50%! 一人ひとりに直接面接!
- * しかし、実態は下記の通り!
- * 1.5. 2010年の国勢調査にて、より精密な分析(213頁)の結果:
- * 59,1%がunhappyやnarrowly (ほぼ) unhappy!!!

*

*

2. GNHの本質

- * 2. 1. 1729年にZhabdrung Rimpoche氏は「政府が国民の幸せを実現できなければ、政府の存在価値がない」という名言を残した。
- * 2. 2. ブータンのJigme Singye Wangchuck国王は1972年GNHの考えを発表した。その目的はブータンの文化及び仏教精神に基づいた社会の形成である。
- * 2. 3. しかし、国王の考えの元での「ブータンの文化」とは、国王の民族であるンガロング (Ngalong) の文化及びチベット仏教のDruk 派をに基づくため、他の民族の文化と宗教、即ちネパール系ブータン人及びシャルチョップ系ブータン人の文化と宗教は排除されていた。GNHはその出発点から一種の同化政策であるといえる。
- * 2. 4. ブータン政府にとって「文化の保存」は国王の民族文化の保存を意味する。他の民族の文化と宗教を同等に受け入れないので文化の多様性や多文化主義を認めない。1990年代のブータンの教科書を分析すれば、そのことが分かる。

3. GNHの国際的普及への促進

- * 3. 1. 1998年SeoulのUNDP 会議でブータンの外務大臣Lyonpo Jigmi ThinleyがGNHを紹介した。
- * 3. 2. 1999年にThe Centre for Bhutanese Studiesは、1999年3月にブータンで行われた国際ワークショップの結果を書物として発表した。主催者は政策企画委員会(Planning Commission)であった。
- * 3. 3. それ以降GNHに関する国際会議が数多く開催されたが、ブータン難民の歴史は取り上げられていない上、抽象的な一般論の発言が中心であった。
- * 3. 4. 2013年7月に選出されたTshering Tobgay首相が、世界的規模で展開していたGNHの普及活動を中止し、国内の経済的復旧を政策の中心にすると発表した。しかし同時に、今後も仏教の精神に基づき政権を継続する考えを明らかにしたため、同化的政策が続くことになりそう。

4. なぜこれほど遅い？

- * 長年注目されなかったGNHの思想が、再び強調されるようになったきっかけは1990年代前半発生した、約10万人のブータン難民である。
- * 特に、人口の約20%を占めるチベット仏教ニンマ派[1996年と97年)の僧侶によって行われた民主化運動の弾圧以降、ブータン政府に対する難民問題の解決を求める国際的圧力がさらに強くなった。このことが主な背景になって、ブータン政府は1998年以降、GNHを強調しはじめたのである。
- * ブータン政府の狙いは、GNH及びブータン国民の幸せを強調することで、ブータン難民の問題を世界の世論に忘れさせることにあった。
- * そして他にも1点注目すべき事実がある。世界中のほとんどのブータン研究者はNgalong(王の民族)のみを紹介してきた。その結果として他の民族が存在しないと思われたのである。
- * もう一つの主な要因は、多くの留学経験のある若者がブータンの伝統的(仏教的)価値観に対して無関心であったことである。その傾向に対応することがGNHを普及させるもう一つの狙いであった。
- * 1999年はブータンでテレビとインターネットが始まった年でもある。

5. ブータン社会におけるGNH導入の矛盾点： ブータンの統計及び政治に対する信頼

- * 言論の自由が存在しない
- * TSA WA SUM: 国王, 政府及び国民に対する批判が禁じられている(罰則を伴う)
- * メディア・コントロールの存在
- * その結果として、学問的研究の信頼性が疑われる
- * ブータン国内のGNHに関する研究も同様に信頼性がない

5. 1. ブータン統計の不正確さ

- * Colombo Plan(1972年): 人口、経済、社会等の全てのデータが、根拠がないのに、国王の姉及びインド大使 Nari Rustomjiによって提供された。
- * 人口: 1975年に国連加盟の際、ブータン政府は人口が100万人以上あることに決めた。
- * 1990年代半ば、統計上の167万5千人の人口が突然67万5千人に変更された！
- * 1988年の国勢調査際に 人権侵害が多発した後に、。
- * 国勢調査の具体的データが発表されなかった！
- * 人口は2005年:634, 982人と2010年:733, 004人
- * 2013年9月 National Statistic Bureau:740, 943人、しかしHome Ministry:633, 607人！ 難民の親戚？

6. 民主主義及び人権の不在

- * 1989年以降、ブータン南部の人口が虐殺、拷問、レイプされた。
- * Ngalongの民族衣装を着ていないと逮捕される。中には、ヒンドゥ教少女の長髪を切る等の宗教的差別が横行する。
- * 武器によって脅迫され、「自由意思でブータンを去る」と書かれている用紙に無理やりにサインさせられる。
- * 2007年まで憲法、政党、選挙がなかった。国政選挙は2008年と2013年に実施されたが、疑問点がある。
- * 難民キャンプ1か所のみで確認作業の実施の問題点が多く、例えば、子ども100名以上が犯罪者になること！

6. 1. 宗教的自由の不在 同化政策の継続

- * キリスト教及びイスラム教の信者は、「宗教か国か？」という質問に対して「宗教」と答えると5年間刑務所に入られる。
- * キリスト教の映画を放映したために、騒動を起こしたとして3人のが3年間刑務所に入れられる事件が発生した。
- * キリスト教の墓設置が許可されない。
- * 国王民族の宗教であるDruk派への改宗の圧力
- * 地名を国王の民族が話しているツオンカ語への書き換え
- * 学校教育における同化教育の強化

7. ブータン国内の不幸な国民

- * ブータン難民の家族及び親戚に対する弾圧
- * Shabdrungの転生(incarnation) : 1907年までにチベット仏教のトップであった支配者 (theocratic ruler) のうち3人がインドの亡命先で殺害され、最後の時は2003年だった。同じ年にブータン国内で2歳男児が第4転生として発見され、インドへ亡命した後に、ブータン政府によって確認という名目で、親共々強制帰国させられ、現在至るまでブータン国内で監禁状態の生活を送っている。
- * 国王は「転生」が王政を揺るがすことを警戒している？
- * 民族及び宗教の少数者
- * 高学歴の若者の就職難

8. ブータン国外の不幸な国民

- * 約3万8千人の難民は現在(2013年4月25日、UNHCR NEPAL)ネパールにある2か所のキャンプに住む。
- * 他に、ネパール及びインドで2万~3万人の難民が住んでいる。
- * 2007年以降、第3国に住むことになったブータン難民は
- * 78, 382人(2013年4月25日、UNHCR NEPAL):
- * USA 66,134, CAN 5,376, AUS 4,190, NZ 747, DK 746,
- * N 546, NL 326, UK 317

9 ブータン難民の歴史

- * * 本質的には 民族対立、民族浄化ではなく、人権及び民主主義の不在の問題である
- * * 1985年:国籍法改正
- * * 1988年:国勢調査及び「一国家・一文化」政策の開始(1958年の証明書！)
- * * 1989年Tek Nath Rizal氏(国王のアドバイザー)は同化政策の開始(人権侵害)に対し、国王に請願書を出した後に逮捕され10年間囚人となった。1999年に釈放された。
Amnestyの良心の囚人(「ブータンのMandela氏」)

- * Tek Nath Rizal氏は自分の政治活動及び受けた拷問について3冊の本を出版した。
- * 受けた拷問の中にADP技術も利用された。それによって人間の生物的機能が電子機器によってコントロールされるのである。technology: control of biological functions by electronic instrumentation)
- * Rizal氏の結論は「Gross Human Rights Violations」(GHRV)
- * 1990年: 大規模デモ（すくなくとも1000名が殺害された）の後、追放が開始された。
- * その対象となった約10万人のうち、ネパール系ブータン人は約90%, 残りはSharchop and Ngalong。
- * 1996年:に United Front for democracy創立:代表は Rongthong Kunley Dorji氏になった
- * ネパールとブータンの2国間会談
- * ブータン難民に関する国際会議が一回も開かれず,国連の役割が問われている。
- * 2007年以降第3国への移住が実施された

10. GNHに関する国際的な動向

- * 国連の第65回総会の際、決議草案の中に「幸せは発展のためのホリスティックアプローチである」という一文が挿入された。
- * 2005年に東京でGNH研究所が創立された。
- * 日本国内の研究は主に経済学者
- * 2009年にアメリカでGNHUSAが創立された。
- * 2004年12月のInter-Religion and International Federation for World Peace Conferenceの際、T. N. Rizal氏及び2名のネパール人政治家の演説が中止となった。その背景に、ブータン政府のGNHが紹介されている資料が配布されたことがあった。その他Rizal氏は現地の新聞で反逆者として紹介された。
- * 米国でのブータン政府主催のシンポジウムに対して米国在住の難民が抗議した。
- * ブラジル政府によって2011年の憲法改正の際、GNHが憲法に明記された。
- * GNHは世界の流行語になった。
- * 2012年4月：国連総会が人間が幸福への権利を持っている文章を決議

11. 解決手段

- * * ブータン難民問題を解決するための国際会議の開催をUNHCR及び国連に要請する。
- * * GNHの思想にある良い政治を始め、全ての民族の文化及び宗教を尊重することをブータン政府及び国王に要請する。
- * 帰国希望のブータン難民の人権を尊重した上で、帰国を実施する。
- * * Global Peace Index: 2007年ブータンは19位、しかし2011年には34位、2012年は19位(2011年の地方選挙が背景)

参考文献

- * Ahura Bhutan, “A Shangrila without Human Rights”, 1993, Jhapa, Nepal
- * Bhutan News Service
- * Centre for Bhutan Studies, Thimphu
- * Druk National Congress, “The Silent Suffering in Butan”, 1994, Kathmandu
- * Jogen Gazmere, “Politics of Bhutan”, 2007, Kathmandu, DVD
- * Hutt Michael, “Unbecoming Citizens Culture, Nationhood and the Flight of Refugees from Bhutan”, 2003, Oxford Univ.Press
- * KUENSEL
- * 根本かおる、「ブータン『幸福な国』の不都合な真実」、2012年、東京
- * Terue Ohashi,「幸福立国」、2010、Tokyo
- * Ibid.,「ブータンのGNH (Gross National Happiness:国民総幸福)の算出手法とHSM(Human Satisfaction Measure:人間満足度尺度)のVer.6の開発」、Reitaku International Journal of Economic Studies Vol.18, No.2 , September 2010
- * Ranabath Aastha, “To go or not to go: Decisions about resettlement by Bhutanese refugees in Nepal”, Kobe University, 2012, June, 修士論文
- * Ringhofer Manfred, “Bhutanese Refugees History and Present Situation with Emphasize on Education”, Lifelong Education and Libraries, NO.2, March 2002, Graduate School of Education, Kyoto University, pp.43-72
- * Rizal Tek Nath, “Ethnic Cleansing and Political Repression in BHUTAN”, 2004, Kathmandu

- * Rizal Tek Nath , “From Palace to Prison”, 2009, Kathmandu
- * Ibid., “Torture Killing Me Softly”, 2009, Kathmandu
- * Nari Rustomji, “ Bhutan The Dragon Kingdom in Crisis”, Delhi,1978
- * Sakurai Riho, “Preserving National Identity and Fostering Happiness in an Era of Globalization: A Comparativ Exploration of Values and Moral Education in Bhutan and Japan”, Journ. of Internat. Cooperat. in Educ., 14, No.2 (2011), 169-188
- * The Centre for Bhutan Studies, ”Gross National Happiness”, 1999, Thimphu
- * Ibid., An Extensive Analysis of GNH Index, May 2012
- * University of Tokyo, GPSS-GLI “Group Report Bhutan Unit”,
- * Field Exercise in Frontier Issues(FEFI), 15.April 2013,未公開
- * Karma Ura, “Culture, Liberty and Happiness”, 2006, Seminar on Media and Public Culture, Centre for Bhutan Studies, Thimphu